

コラム①：認知症カフェ「オレンジサロン 石蔵カフェ」～役割を認識して責任感が生まれた～

- 「認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）」では、平成25年度以降、「認知症カフェ」の普及などにより、認知症の人やその家族等に対する支援を推進するとされている。
- 家族の会のついでに認知症のAさん（当時70歳）が「何か人の役に立つことをしたい」と訴えたことから、家族の会では、「本人の希望を形にしたい、認知症のことについてもっと地域の方に知ってもらいたい」との思いで、カフェを開くこととした。
- 使われていなかった石造りの蔵が、地域のボランティアの人の手によって改修された。
- カフェの運営には、家族の会の世話人、サポーターが携わり、コーヒーなどの飲みもの、ケーキ、地元産の野菜を中心にしたランチを提供している。
- カフェには、認知症の人やその家族だけでなく地域の人々が訪れ、毎回30名ほどの利用者がある。
- マスター役のAさんは、黒のエプロン姿で注文を聞き、コーヒーやケーキを運ぶ。認知症の利用者には、食器の片づけや皿洗いのなどの手伝いをしてもらっている。認知症の本人一人ひとりができる範囲内で役割を担っていることがこのカフェの特徴になっている。
- 家族の会栃木県支部代表の金澤林子さんは、「Aさんはマスター役を務めることにより、自分の役割を認識して責任感を持たれるようになったと感じます。人と話をするのが楽しくなってきたようです」と認知症カフェの効果を話している。

コラム②：「子育て・まちづくり支援プロデューサー」プロジェクト

- これまで仕事一筋で生きてきた男性たちが定年を迎えると、ようやくできた自分の時間の使い方に悩む人も少なくない。
- 長年、企業人・職業人として活躍してきた男性たちの持つ豊富な経験を、子育てを核とした新たな地域づくりに活かしてもらおうと、NPO法人あい・ぼーとステーションは「子育て・まちづくり支援プロデューサー」プロジェクトを住友生命保険相互会社の助成によって運営している。
- 子育て・まちづくり支援プロデューサー（以下、「支援プロデューサー」という。）になるためには、法人の開催する、講義や実習・現場体験等の養成講座を履修する必要がある。
- 平成26年4月現在、第1期の養成講座認定者36名が支援プロデューサーとして活動しており、平均年齢は約63歳である。
- 主な活動場所は、法人が子育て支援等で協働体制を築いている港区、千代田区、浦安市であり、年中行事を手伝ったり、バザーなどを企画・運営したりと活動内容は多岐にわたっている。
- 「現場で保育に関わる方たちが、より保育に専念できるよう、バックアップしていきたい」、「自分たちが先駆者として、前例を作っていきたい」と、地域の子育て支援のバックオフィス機能を担うべく、今後の活動について、支援プロデューサーは意欲を見せている。
- 自治体と協働して、法人はこれまでに、特別支援学級や特別支援学校に在籍する児童を対象とした、学校休業期間の日中の活動支援事業でのサポート活動「フレンズビレッジ」（千代田区）などを行ってきた。
- 法人では、今後、第2期の養成講座認定者を新たに支援プロデューサーとして迎える。活動内容の多様化や自治体や企業との更なる協働を目指し、あらゆる活動に挑戦していく。